

全施連全国大会 in 札幌 全国から648名が参加

平成25年10月21日～22日に、「第9回一般社団法人全国知的障害者施設家族会連合会 in 札幌」大会が開催されました。26都道府県から648名の参加があり、「鹿施連」からは、兼廣倫生会長と岡元鐵哉事務局長の両名が参加しました。

大会のテーマに、『知的障害を持つ人の生涯を考える』を掲げ、知的障害者と家族について多くの方と交流を深め、今後の運動の方向性や課題について共通の認識を持つことができました。

第1日目は、埼玉大学教育学部准教授 宗澤忠雄氏の基調講演があり、『新しい施設像』として、◎少子高齢化を見据えた施設 ◎小規模化した核家族の困難を克服できる施設 ◎「退出可能な親密園」と施設を核にした社会資源群を創造する施設等々、3つの視点が提起されました。

基調講演後、大会のテーマ『知的障害を持つ人の生涯を考える』に関わって、南副理事長がファシリテーターを務め、5人のシンポジストによるシンポジウムが行われ、次のような意見を述べられました。



- ・知的障害の当事者は我々親である。親、家族が動かないと政治を変えることはできない。仲間を増やして諦めないで願いの実現に力を尽くそう。
- ・高齢・病気で施設を離れても、優先的に戻れるようにする。施設での医療を受けられる様にし、終の住処という観点から、新しい施設を創造すべきである。
- ・施設を拠点とする地域づくり、福祉づくりが必要である。「障害のある人のために」だけの目的、方法、内容では限界がある。
- ・家族と職員の相互理解が必要である。家族は職員の大変さを理解し、職員は障害者をトータルに人として観るべきだ。国家の財政悪化により、福祉の課題解決は、厚労省から財務省に移っている感がある。
- ・親の要求の実現は、施設や職員の犠牲の上に成り立っている側面がある。細かい視点からと大きい視点からの運動を融合させ、親の元より充実した生活を送れるようにするための施設をつくる必要がある。

第2日目は、岩本副理事長による会務報告、由岐理事長の情勢報告がなされた後、『終の住処はどこですか』というテーマで、フロアーからも参加し全員参加型の討論会がありました。

最後に大会決議文を採択した後、次回の全施連の全国大会が愛知県の豊橋市であることを確認し閉会の幕を閉じました。

大会決議文

- ① 知的障害のある人の生涯を考え、その人が望む暮らしが選択できる仕組みを実現する活動
- ② 知的障害のある人たちへの支援は、一人一人の障害特性等を基本に適切に行われることを求める行動
- ③ 障害福祉は公の責任で行うことを求める行動
- ④ 障害のある人たちへの福祉の向上に、志を同じくする障害団体との連携を深める行動

障害者権利条約を承認

昨年（平成25年）12月の国会で障害者権利条約が全会一致で可決されました。この条約は障害者の人権と基本的自由、個人の尊厳を保障する大変重要な意義をもつものです。

担当する外相も、条約締結を『スタート』として、条約に基づく国別勧告に適切に対応し、「国内対策の充実に向けて努力する」と表明しました。

また、この条約の素晴らしさは、「私たち抜きに、私たちのことを決めないで」という障害者団体などの代表の声が条約策定に大きく貢献したことです。

条約の障害のとらえ方は画期的です。これまでは、障害を医学的な原因や種類でとらえてきましたが、条約では**障害と社会の関係の中で結果的に生ずる「生活のしづらさ」を障害としてとらえています**。人間の尊厳が重んじられ誰もがその人らしく生きていける世の中の仕組みにする、これは全施連と同じ立場です。

条約には、「インクルーシブ」=分け隔てのないという言葉も盛り込まれました。インクルーシブな社会とは、**障害のない市民との格差や偏見、差別のない社会**です。

障害者が、生きやすい社会は、他の人にとっても生きやすい世の中です。全施連としてもこの条約を物差しにして、さらに運動を強化し、関係機関に働きかけることが求められます。

家族並びに施設職員研修会 ～300名超の方々が参加～

平成26年1月25日、26日の2日間、ホテル京セラで家族並びに施設職員の研修会が行われました。

研修に先立って、主催者を代表して「鹿児島県知的障害者福祉協会」会長 中村邦彦氏の挨拶と、「鹿児島県知的障害者施設家族会連合会＝鹿施連」会長 兼廣倫生氏から1年間の活動報告がありました。

一日目の研修Ⅰは『一笑健明(いっしょうけんめい)』～楽しく生きましょう！～という演題で「ハローENJOY札幌」の施設長(財団法人日本障害者福祉協会)会長 橘文也氏の講演がありました。

演題のタイトルにふさわしく、大変気さくでユーモアにあふれた方でした。

まず、知的障害者福祉協会の歩み・組織・活動状況の説明がありました。重たい内容の話なのですが、ダジャレを飛ばして座をなごませてくれました。今、障害者福祉にとって【情勢を動かす人が必要】という言葉には、共感した方が多いと思います。

次に、国の動きに言及し、障害者総合支援法施行後1年がたち、様々な面で見直しに着手しているということにふれました。情勢を動かすために、施設関係者は勿論、私達保護者が“物言えぬわが子”に代わって大きく声を上げる時だと痛感しました。

あってはならぬこととして、施設での虐待の問題にもふれられ、その原因を①人権意識の低さ②人手不足③専門職としての意識の欠如④管理者の教育不足としてとらえ、克服しなければならない焦眉の課題として位置付けられました。

福祉施設で、日夜奮闘している職員の方に、励ましのエールも自分の体験を交え、万感をこめて贈られました。専門職として使命感を持ち、3K(感動、感激、感謝)を胸に、利用者の方に、『一笑健明』を、職員の皆様は、『笑寝義趣＝エネルギー』に、この気持ちの持ちようが地域・保護者家族・行政・施設事業所の連携につながることを熱く語られました。



研修Ⅱは、家族と施設職員が日頃の思いを自由に出し合い、利用者にとってよりよい施設を築く上で、共通理解の深まる場となりました。

2日目の研修Ⅲでは、鹿児島市地区支部の川口氏、北薩摩地区支部の田中氏が「家族として思うこと」というテーマで家族の思いや直面している問題等について発表がありました。

研修Ⅳでは、MBC南日本放送局のウェザーキャスターの前田一郎氏が『天気と元気』という演題で、予報士としての使命感や喜び、悩み、テレビ放送の裏話やこぼれ話などを楽しく語っていただきました。昔から言い伝えられている天気のことわざにも詳しく楽しく触れられ、ロマンに満ちた話は、毎日の生活に欠かせぬ情報のひとつとしての天気予報から、文字通り私達に元気を与えていただきました。

意欲的に研修、熱く討議！！

～我が子らのために～鹿児島県知的障害者施設家族会連合会の研修会

平成25年11月15日（金）、鹿施連の研修会を「ハートピアかごしま」で行いました。

講師に吉田愛青園園長 荒武純博氏を迎え、『障害者の高齢化に伴う諸問題』というテーマで講演されました。

まず、障害を持った方が高齢化することで身体の機能低下が顕著になり、けが等をちょっとしたことでし易くなるので浴室をコルクにしたり、バリアフリー化したりしていることにふれました。

疾病にも罹りやすくなり、糖尿病や高血圧、骨粗鬆症などが多いということでした。

がんを発症しても知的障害ゆえに、術後のケアができないが為に手術を控えざるを得ないこと、認知症の進行がはっきりしないことの苦悩、辛さにもふれられました。

老化を防ぐ手だての一つとして、歩くことを重視し、個々人の状況に応じて実行されているそうです。また敢えて、食堂を二階にし、階段を上下することを職員の支援のひとつとして位置付けていること、施設内にAEDや酸素ボンベなどを備え、職員が的確に使えるように研修を重ねているということでした。

通院する利用者も増加しているそうですが、感染症への感染を防止するために、病院の待合室で待たず、車内で待機させているという話には行き届いた配慮だと感心しました。

さらに、今後の大きな課題として、①胃ろう・吸痰の問題 ②成年後見人をどうするか③入院や手術しなければならなくなった時などの対応④看取りの問題などの課題が山積していることを指摘されました。

特に③の場合、病院側は当然のことながら書面で同意を求めます。緊急の時もあるので施設長を代理人にお願いする、施設と覚書を交わしておく等必要があること、また、入院が長引いた場合、急性期だけは病院が見てくれるが、それ以降は家族や施設が探さなくてはならないので、深刻な事態になり得る可能性があることなどにふれられました。

質疑応答では、講師の先生や執行部に、

- ①参加しやすくするために日程を工夫する
- ②知的障害者と介護保険の関係
- ③成年後見人がいない場合の対応
- ④全施連の大会決議は、どの政党にも伝えられているのか、などの質問が寄せられ、ひとつひとつ丁寧な回答がありました。親や子どもの高齢化に直面している私達にとって有意義な研修会となりました。



セルプ鹿児島は市の南部、緑豊かな平川町にある通所施設です。34人が元気に通っています。保護者会は「子ども達のために」を一番に、資料の作成や会計などを保護者の手で運営しています。

月に1回『保護者会だより』を発行し、各会合の案内をしたり、保護者会の内容の周知・会員の方への協力等をお願いしたりしています。



一人一役を基本に無理のない範囲で係（施設の行事の手伝いなど）をしていただいています。

活動内容は4月の総会で決めます。施設見学会、親子職員レクリエーション、忘年会、音楽鑑賞会、月2回のウォーキングなどです。今年の音楽鑑賞会は4人の演奏家を招いて利用者・職員・保護者が集い、心豊かなひときを過ごしました。

また、ふれあいスポーツ大会や駅伝大会の参加者には参加賞、クリスマスやバレンタインデーにはプレゼントをしています。

さて、会員の協力を得て運営している本会ですが、年4～5回の話し合いの参加者が固定化し、会員の皆さんの声を聴くのが難しくなっています。

利用者の高齢化に伴い、課題が山積んでいます。親亡きあとを見据え、施設のご理解のもと、安心して子ども達の将来を託せる体制作りが急務です。そのために、保護者会として今後も心を合わせ活動していきたいと思っています。（内村）

研修会を開催・・・保護者参観後 真剣に学びました・・・ゆうかり学園

家族会では、平成25年11月2日、学園主催の保護者参観の日、利用者の方達の活動の様子を参観した後、研修会を行い、学園の利用者の現状やこれからの課題について理解を深めました。

理事長出席のもと、「高齢化に伴う施設の現状と課題」というテーマで、二名の職員を講師に迎えお話を伺いました。

高齢化によって、糖尿や血圧に関する疾病が多くなり、脚力・視力・聴力の低下、拒否行動や睡眠障害・失禁などが目立ってきていることなどの報告がありました。施設として、そのような現実に対して①日常観察を徹底する②決まった時間だけでなく、こまめに声かけをする③支援の在り方や認知症に対して研修を深める④保健委員会を定期的に持つ、等々の対策をとっているということでした。会議の時間がなかなか取れないので、始業前にやっているということです。頭の下がる思いでした。施設での暮らしをメリハリのあるものとするために、「暮らす」「働く」「支える」を基本に、様々なイベントに参加したり、家族や医療機関との連携を深めたりしているという話もありました。最後に、理事長から、入園後亡くなった方々を慰霊するため、また利用者が気軽にお参りできるようにするため慰霊塔を作りたいという話がありました。家族として感銘を受ける話でした。お忙しい中ご参加ありがとうございました。（川口）

全施連の活動の様子をお確かめください

全国的障害者施設家族会連合会の活動の様子は、ホームページ <http://zenshiren.web.fc2.com/>で見ることができます。「かごつま家族ネット」など各県の連合会発行の会報も紹介されています。

【編集後記・編集部からのお願い】会報「かごつま家族ネット・第3号」をお届けします。読み辛い部分もあると思いますが、ご容赦ください。今回は、大会、研修会、地区支部の活動の様子が中心になりました。次号でも、各地区支部の様子を紹介いたします。